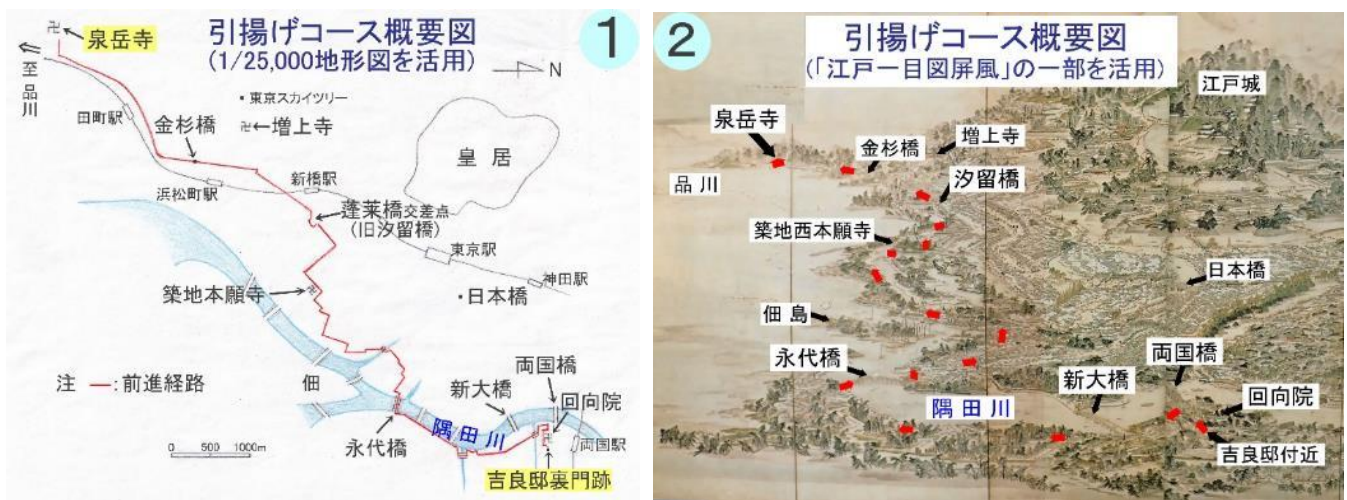


東京散歩 ～ 赤穂浪士討入り後の引揚げコースを辿る

赤穂浪士・大石良雄以下 47 人は、吉良邸討入りに成功した後、泉岳寺まで引き揚げました。12 月 14 日、江戸時代の景観などを想像しながら、そのコース【吉良邸裏門跡(墨田区両国)～墨田川東岸沿い～永代橋～築地本願寺～蓬莱橋交差点～旧東海道～第 1 京浜～泉岳寺(港区高輪)】を辿りました。当時とは橋や道の位置がずれているため、浪士たちと全く同じ道という訳にはいきませんが、凡そのルートは今も辿ることができます。コースは文献により異なる部分がありますので、裏付け資料が豊富と思われる「赤穂義士の引揚げ」(街と暮らし社、2006 年発行)を参考にしました。また、「江戸名所図会」等については、「国立国会図書館デジタルコレクション」等を利用しています。

先ず、引揚げコースを概観します。

1. 引揚げコース概要の現代版です。細部については最終ページの詳細図を参照して下さい。
2. こちらは江戸時代版です。「江戸一目図屏風」(文化 6 年(1809)刊行)の東部分を切り抜き、主要な地名と引揚げ方向を加筆して、左の現代版と比較ができるようにしてみました。



3. スタート地点の『吉良邸裏門跡』;㉑付近(パノラマ加工)です(両国 3 丁目 10-1)。吉良邸は東西 73 間(約 133m)、南北 34 間(約 62m)、2,550 坪の広さがあり、裏門は西側にありました。白の点線部分は吉良邸南西部の角、道を挟んでその前には浪士の一人・『前原伊助邸跡』;㉒があります。四十七士は裏門を明け六ツ(午前 6 時頃)に出発、先ずは待機と休息を求めて回向院の山門に向かいます。

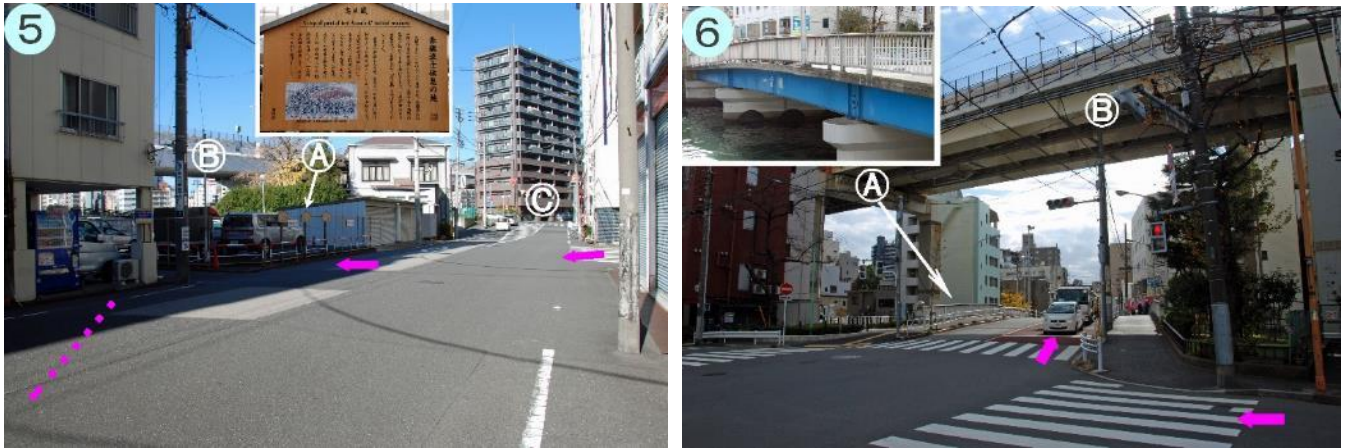
4. 『回向院山門跡』;㉑付近です(両国 2 丁目 8-10)。ここで寺僧と掛け合ったもの、浪士たちとの関わりを恐れて門は開けてもらえず、両国橋東詰めに移動して小休止することになります。㉒は東西に走っている京葉道路(国道 14 号)です。





5. 当時の両国橋東詰め・『赤穂浪士休息の地』;①付近です(両国1丁目1-3)。②は首都高速道、③は京葉道路です。当時の両国橋は現在よりも50mほど下流側に架かっていました。

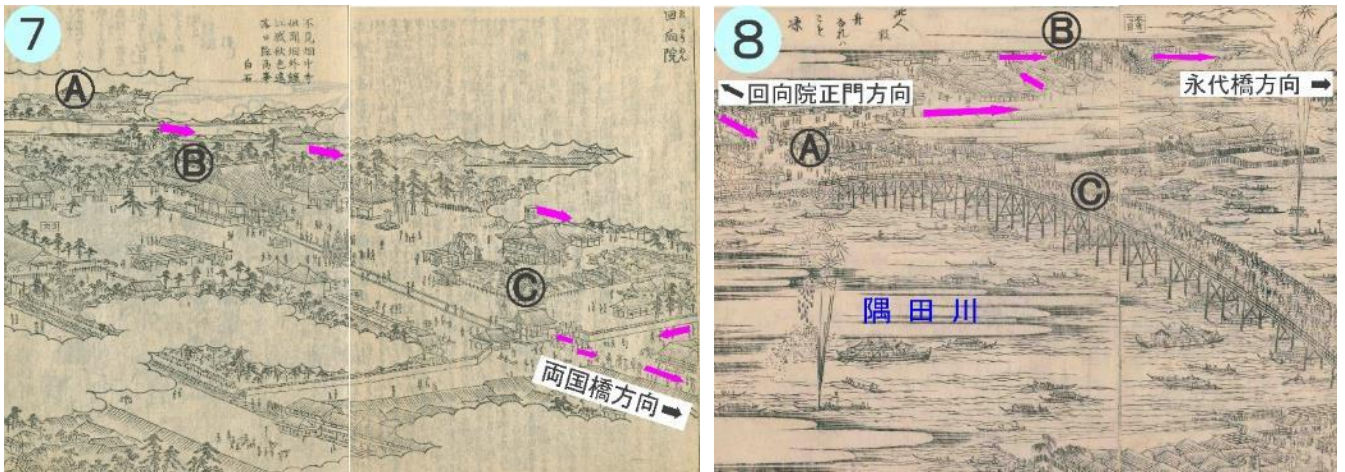
6. 小休止を終えた浪士たちが渡った、堅川に架かる一之橋(当時は一ツ目之橋);①付近です。②は首都高速道です。



吉良邸裏門跡から一之橋までの経路を、「江戸名所図会」で見えます(掲載分は天保5年(1834)の刊行です。以下、同じ)。

7. 「江戸名所図会 回向院」です。①は吉良邸付近、②・③は回向院の本堂と山門です。浪士たちは、回向院の南側から山門に至り、両国橋方向に移動します。

8. 「江戸名所図会 両国橋」です。最初の休息地・両国橋東詰め;①を出発、堅川に架かる一之橋(当時は「一ツ目之橋」);②を渡り、隅田川の東岸沿いを南下し永代橋に向かいます。③は両国橋です。



9. 一之橋を渡って直ぐの進行方向の景況です。①(『御船蔵跡』)から先の右側一帯は御船蔵のあった場所です。御船蔵は元禄6年に設営された幕府艦船の格納庫で、300m余りの場所に大小14棟が並んでいました。

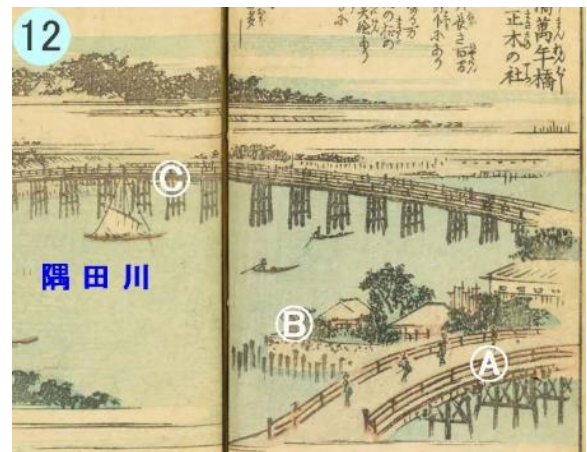
10. 墨田川の東岸を描いた「東都墨田川両岸一覽 東」(天明元年(1781)刊行)から関係部分を切り抜きました。①が御船蔵で、浪士たちはこれらの建物の後方(西側)を通ったこととなります。②・③は一之橋(一ツ目之橋)と新大橋です。





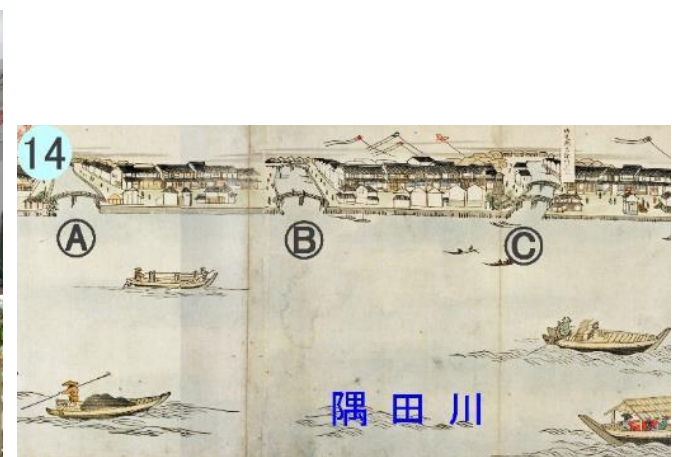
11. 新大橋～万年橋のパノラマです。東岸沿いを南下してきた一行は、小名木川に架かる万年橋;①を渡ります。当時は現在より40mほど西側(赤の点線部分)に架かっていました。②は正木稲荷、③は中央大橋です。

12. 「絵本江戸土産 新大橋、万年橋、正木の社」です。万年橋;①が正木稲荷;②の直ぐ脇に架かっていたことが見て取れます。新大橋;③は万年橋の近くに描かれていますが、当時の新大橋は150mほど下流側に架かっていたためです。「絵本江戸土産」は、嘉永3年(1850)～慶応3年(1867)の刊行です。



13. 清洲橋通り横断直後の進行方向の景況です。当時は手前から上之橋(仙台堀)、中之橋(中之堀)、下ノ橋(油堀)が架かっており、一行はこの道を進み永代橋に出ました。①には上之橋の橋柱、②には『中之橋跡』があります。下ノ橋は隅田川大橋の橋脚;③下に架かっていました。

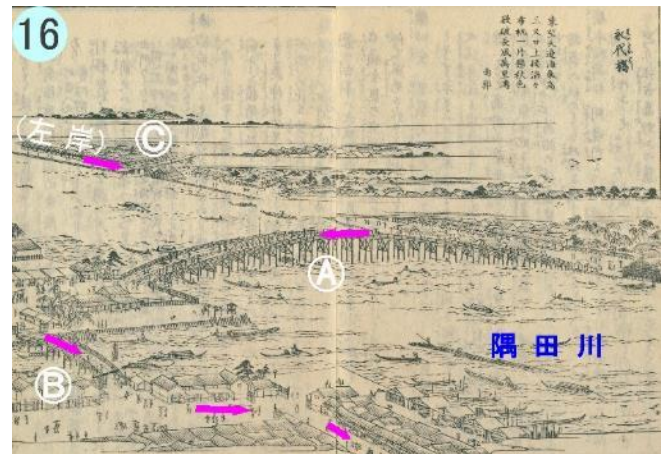
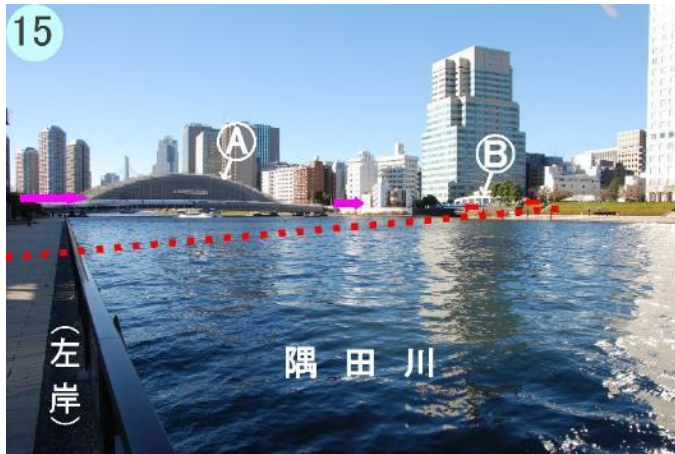
14. 前述「東都墨田川両岸一覽 東」の切抜きです。①～③は上之橋、中之橋、下ノ橋です。河岸沿いに建物はほとんどなく、一行は隅田川(当時は「大川」)を眺めながら引き揚げていったことと思われます。





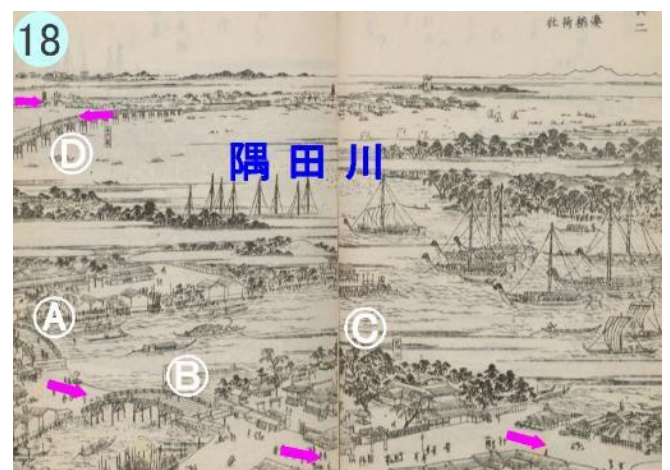
15. 永代橋;①付近です。永代橋を渡り、左折して新川 1・2 丁目(当時は堀に囲まれていたこの地を霊岸島と呼んでおり、越前福井藩・松平越前守の 27,000 坪の屋敷がありました)に向かいます。当時の永代橋は 150m ほど上流側、豊海橋;②の北側に架かっていました(赤の点線部分)。永代橋、豊海橋は共に工事中でした。

16. 「江戸名所図会 永代橋」です。左右の写真は、右岸・左岸が逆になっていますが、永代橋;①を渡った直後に日本橋川に架かる豊海橋を渡り、霊岸島に入ります。③は下ノ橋です。ここからはいよいよ御府内の街中を行進することになります。



17. 亀島川に架かる高橋;①付近です。新川(霊岸島)では、中央部にあった松平越前守の屋敷地域を迂回した後、高橋を渡った先で左折して鉄砲洲通りを進みます。その先には稲荷橋;②(廃橋、石柱があります)が架かっていました。なお、当時の高橋は 50m ほど河口側(東側)に架かっていました。

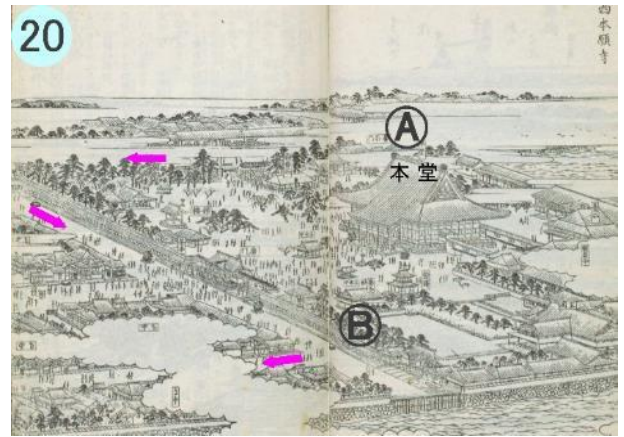
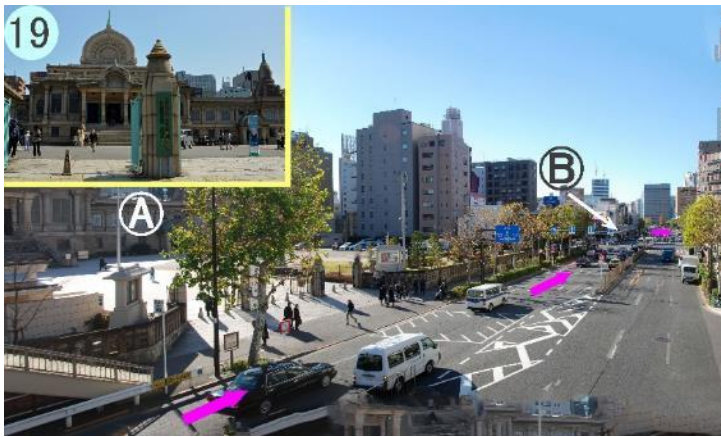
18. 「江戸名所図会 湊稲荷社」です。一行は高橋;①を渡り直ぐに桜川に架かる稲荷橋;②を渡ります。その左は湊稲荷社;③ですが、明治元年に 120m ほど南の地に遷座しています。④は永代橋です。



19. 築地本願寺;①付近(パノラマ加工)です。築地本願寺の堀に沿って進み、築地場外市場の先の市場橋交差点;②を右折して、みゆき通りを進みます。

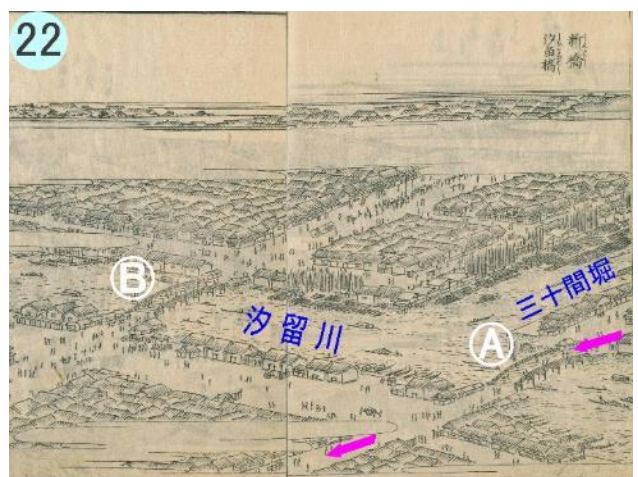
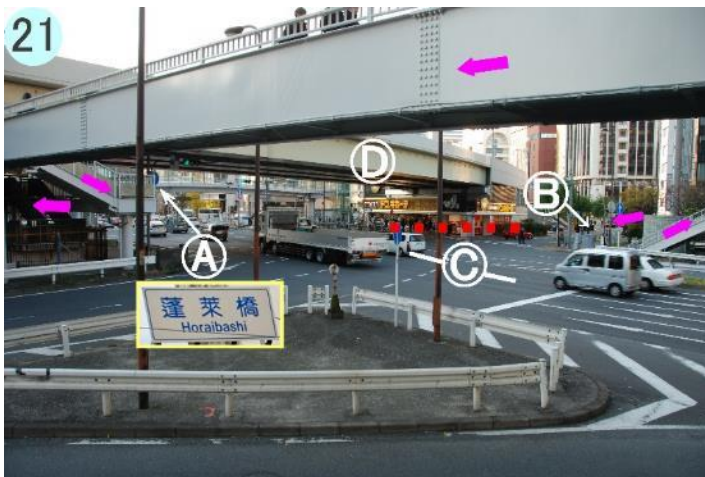
20. 「江戸名所図会 西本願寺」です。浪士たちは、旧浅野家上屋敷跡の横を通り、西本願寺の北側～西側堀沿いを進み、西南角手前;②で右折します。当時の西本願寺は現在の 2 倍ほどの広さがあり、築地場外市場も境内の一部でした。





21. 蓬莱橋交差点;①付近です。本来ならば御門通り;②、更にはその先の昭和通り;③を横断したいところですが、横断歩道はなく、更には両道の間には建物が並んでおり、銀座8丁目歩道橋を渡ることになります。東京高速道路;④の下辺りには当時、汐留川が流れており、赤の点線部分には汐留橋が架かっていたものと思われる。蓬莱橋交差点から150mほど先は第1京浜(国道15号)です。第1京浜の手前(東側)50m付近に並行して通っている旧東海道を進みます。

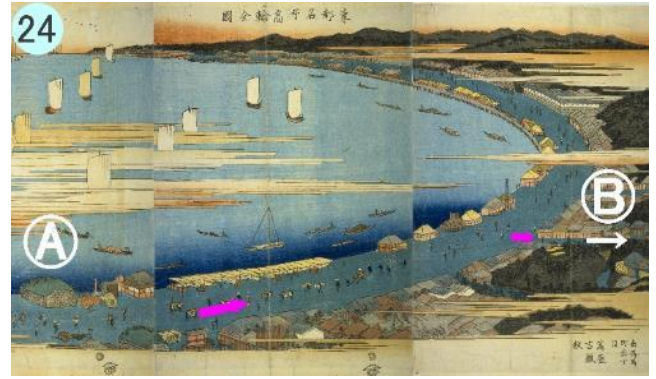
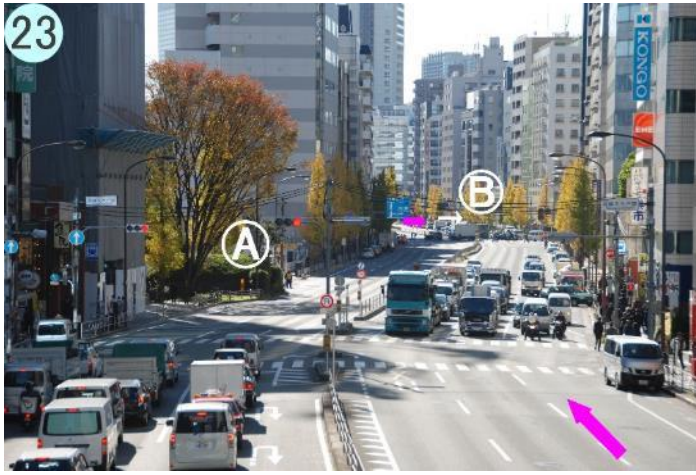
22. 「江戸名所図会 新橋、汐留橋」です。西本願寺から離れた一行は木挽町(現 銀座7丁目)方面に進出、三十間堀手前の道を左折して汐留橋(明治以降は蓬莱橋、現 麩橋)を渡り、登城日を意識して旧東海道を前進しました。新橋;②は麩橋となっていますが、この通りは「通り町筋」と呼ばれていました(現 第1京浜)。



23. 第1京浜沿いにある高輪大木戸跡;①付近です。この左側(東方向)は1kmほどにわたって埋め立てられており(芝浦4丁目)、海は視界に入ってきません。300mほど先は泉岳寺前交差点;②です。

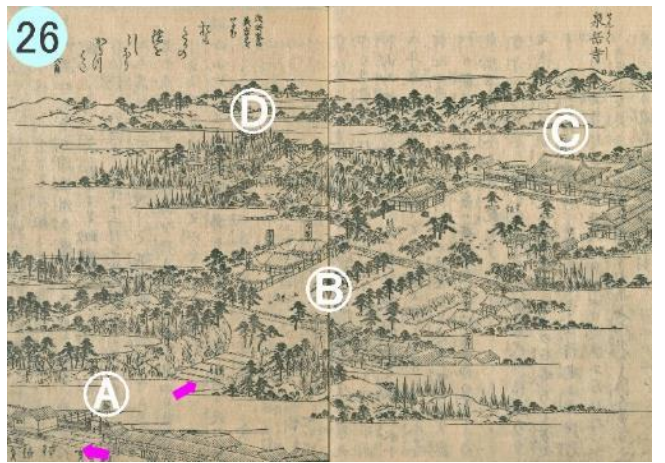
24. 「東都名所 高輪全図」(江戸後期刊行)を合成したものです。一行は旧東海道を進んできましたが、現在の浜松町1丁目交差点付近以降は通り町筋(現 第1京浜)を進みます。高輪大木戸;①から先は、通りの左が海になっています。その先を右折;②すると泉岳寺です。なお、高輪大木戸は宝永7年(1710)に設けられたもので、元禄時代には未だ設置されていませんでした。





25. 泉岳寺交差点付近から西方向(泉岳寺方向)を撮影したものです。①は都営浅草線泉岳寺駅の出入口で、当時、山門のあったところです。

26. 「江戸名所図会 泉岳寺」です。山門;①は通りに面しており、その先は海になっていました(前掲「東都名所 高輪全図」参照)。山門から中門;②までは階段になっています。③は本堂、④は四十七士墓です。浪士たちの泉岳寺到着は五ツ半(午前9時頃)です。2時間ほどの戦闘に続き、10 kgほどもある武具を装着して約11 kmの道のりを3時間ほどで歩いています。



27. 本堂前の様子です。12月14日は「赤穂義士祭」の日で、参道から境内にかけて多くの屋台・露店が出ており、多くの人で賑わっていました。

28. 四十七士墓付近の様子です。一つ一つの墓には、途切れることなく線香の白い煙が立ち昇っていました。また、焼香者の列には外国の人たちも見受けられました。





# 引揚げコース詳細図

